

---

# 2022年夏「ジブンゴト」 沖縄平和研修視察

右谷 浩

立命館大学国際平和ミュージアム附属校平和教育研究会  
立命館慶祥中学校・高等学校

---

## 1章 はじめに

沖縄は、全国の中学校、高等学校で実施される国内修学（研修）旅行で、もっとも代表的な行先の一つである。そして、沖縄修学（研修）旅行を行う学校の多くで、事前学習を実施している。ところが、修学（研修）旅行が、単発的なイベントでのみ捉えられており、他の教育活動とりわけ平和教育との相互関連性や体系の一環が考慮されないまま実施されることが多い。

沖縄修学（研修）旅行の最大の課題は、情報過多であり、結論ありきの戦争学習に留まっているのではないかということに尽きる。例えば、事前学習での取り組みも含めて、与えられた情報を詰め込む学習になっていないか。また「戦争は二度と起こしてはならない」という結論ありきの学習に留まっているか。そして、沖縄を訪問しても、生徒たちは、分刻みのスケジュールに合わせ、受け身の姿勢で、ガイドの話に耳を傾けているのではないか。だから生徒には、ただ「やらされ感」しか残っていないのではないか、という疑問が残る。もし、結論ありきの戦争学習のために、ただ話を聞くことが目的になっているのであれば、オンラインで十分であり、わざわざ時間とお金をかけて現地を訪問する必要はない。

実際に現地に出向き、自分の目で確認し、直接話を聞くことには意味がある。しっかり時間を確保して、身体感覚を総動員しながら思考を巡らせ、「ジ

ブンゴト」で、平和を考える。その際、生徒自らが「問いを立てる」ことが重要になる。

著者は2022年7月21日（木）～23日（土）、沖縄平和研修視察で、那覇市・恩納村・沖縄市を訪問した。沖縄戦77年・本土復帰50年を機会に、「基地の島」沖縄から、「ジブンゴト」として考える戦争の愚かさや平和を希求する思いを知る研修を考えてみたい。

アジア太平洋戦争後、沖縄は1972年の本土復帰までの27年間、アメリカ合衆国による統治下時代を過ごした。そのようななかで、沖縄の人々は、たくましく時代を生き抜き、独特な文化を生みだしてきた。アメリカ世と言われた時代の歴史を学びながら、1945年の終戦から現代へとつなげる平和学習を行いたい。

## 2章 沖縄県における研修視察の成果

### ●不屈館～瀬長亀次郎と民衆資料～

不屈館は、沖縄の祖国復帰と平和な社会の実現をめざして命がけで闘った瀬長亀次郎氏が残した膨大な資料を中心に、沖縄の民衆の闘いを後世に伝えようと設立された資料館である。見学の中では瀬長亀次郎氏の紹介の映像を観ることができた。本人の不屈の闘争はもちろんだが、妻フミさんの生きかた、力強さに感動した。そして、映像で流れていたネーネーズの「教えてよ、カメジロー」の歌声が、今も

耳に残っている。この資料館は、瀬長亀次郎氏個人のメモリアル館のみならず、現在に至る沖縄の民衆の闘いを紹介しているところが特色であり、それを全国の友の会の会員がお金を出し合い、運営を支えている。言わば民衆の闘いの結節点の役割を果たしているのである。これに関わって「もっと広い場所で総合的な沖縄闘争の資料館に発展させたい」と館長の内村千尋氏（瀬長亀次郎の次女）が決意を語られていた。

瀬長亀次郎氏は、1907年島尻郡豊見城村字我那覇に、貧農の次男として誕生した。貧しい暮らしの中でも、教育熱心で、厳しい中に深い愛情のある母親のもとに育った。医学を志して、旧制県立第二中学校に進学し、さらに、東京の私立順天中学校に編入している。東京では、共産主義に感化された。七高（現鹿児島大学）進学後、科学的社会主義理論を勉強していたが、「三・一五」事件にかかわった犯人をかくまったことで、逮捕され、釈放されるも、放校処分となった。戦後は、米軍施政下の沖縄で、1952年沖縄人民党を創立し、沖縄の人々の人権を叫び、米軍の強権に対峙した。その後、1954年人民党弾圧事件が勃発する。それは、共産主義政党であった沖縄人民党に対する米国側からの圧力の現れであった。亀次郎は、つねに監視され、けん制され、拘束され、弾圧された。そして、ついに逮捕され、投獄は2年に及んだ。沖縄人民党は、不正と闘うヒューマンイズムの精神に貫かれ、日本復帰を要求する人民のための政党だった。亀次郎が講演するところになると集まってくる群衆は、4～5万人を数えた。亀次郎は、1956年那覇市長選に立候補する。ついに島ぐるみ闘争に発展し、「人民こそ歴史の主人公」であることを証明し、那覇市長に当選した。ところが、米国側の他党派の議員や財界人の抵抗も強く、翌年、米軍は、布令でもって、瀬長市長を追放し、一切の公職につけないようにした。

瀬長亀次郎氏の功績は、プライス勧告による収容された軍用地の地代を一括で、払い終えようとする一方的な措置に対して、「土地を守る四原則」を掲げ、島ぐるみ闘争を行い、つねに大衆運動の先頭に立って、闘ったことである。また、党派を超えて、

1960年沖縄県祖国復帰協議会（復帰協）の結成に奮闘した。その闘争は、復帰前から声を挙げる闘いであり、反基地闘争であり、党派を超えた島ぐるみの統一した闘争であった。現在、普天間基地返還、辺野古移設で、世論が揺れる中、基地増強は着実に進んでいる。「基地があるから問題が起きる」と、本土並みでの復帰を要求した瀬長亀次郎は、いまの沖縄をどう思うのだろうか。

不屈館は、沖縄の戦後史が瀬長亀次郎氏を通じて、学べる資料館となっている。見学は、1時間コースだが、狭小空間での展示であるため、20～30人程度の入館が、限度である。そのため、近隣の「対馬丸記念館」との交互見学をしたい。

#### ●沖縄尚学中学校・高等学校地域研究部

沖縄尚学中学校・高等学校は、那覇市の南部の国場という地区で、那覇市を一望する丘の上に建っている。中学の屋比久校長と地域研究部顧問の伊波先生が待っていてくれた。

地域研究部は、現在、高1.2生20名が在籍し、その活動は、白梅学徒隊（旧制第二高等女学校）の戦争体験の継承と広島女学院との交流、国場地域に残る旧盆のエイサーの継承に取り組んでいる。

伊波先生によると、白梅学徒隊の戦争体験の継承は15年間に及ぶが、体験者の高齢化とコロナ禍で、現在、再開が難しい状態だそうだ。白梅学徒隊とは、沖縄戦で、従軍看護師として犠牲になった第二高等女学校の四年生56名によって編成された部隊の名前で、映画「乙女たちの沖縄戦～白梅学徒の記録」にもなった。白梅学徒たちは、わずか18日間の看護教育を受けただけで、第一野戦病院に配属され、兵士の治療に当たった。負傷した日本兵が次々に運び込まれて、ベッドが足りなくなる。多くの兵士は床や通路に寝かせられ、負傷兵を治療するよりも、負傷した腕や足をノコギリで切り落とすしかなかった。そんな手術の手伝いをしたのが、白梅学徒であった。つい先日まで青春を謳歌していた10代の乙女たちには、あまりにも残酷な戦争の現実であった。兵士の傷口に湧いたウジを取り、ズボンにたまった糞尿の処理をする。やがて病院壕にも米軍が

迫り、歩けない兵士は毒殺にされる。学徒たちも、米軍の攻撃にさらされて命を散らしていく。動員された56名中22名の命が奪われた。その戦争体験を聞き取り継承する取り組みを続けている。そして、広島女学院高校の沖縄修学旅行にあわせて、3時間くらいかけて、3～4名の体験談を聞き、平和について、交流を重ねていた。

また、旧盆の7月15日、ワークイの晩に行われていた国場の念仏エイサーは、踊り方や衣装に特徴があり、エイサー本来の形を現在に伝える貴重な民俗行事とのことだ。国場地区では、年々継承者が減り、国場地区にある沖縄尚学に話が合ったとのこと、エイサー本来の形を後世に引き継ぐ意義も大きい。

#### ●創価学会沖縄研修道場米軍旧核ミサイルメース B 基地

7月22日（金）、早朝より、旭橋・那覇バスターミナルから20番名護西線に乗車し、谷茶の丘をめざした。途中の車中で、はじめて広大な嘉手納の米軍基地を目の当たりにした。恩納村のムーンビーチの青い空と海とは、あまりにもかけ離れた光景に愕然としたが、それ以上に、創価学会沖縄研修道場内の米軍旧核ミサイルメース B 基地に衝撃を受けた。

創価学会沖縄研修道場は、茶谷の丘の上にあった。登りついたら、東シナ海の青い海が広がっていた。一見すると、ここに核ミサイルの基地があったとは全く感じない絶景ポイントであった。入口で受付をすると、主任の我如古氏が待っていてくれた。ロシアによるウクライナ侵攻以降、来館者が急増しているとのことだ。この日も、数組の来館者がいた。我如古氏のご厚意で冷たいお茶をいただき、TBSの「報道の日」の特集を視聴させていただいた。その内容は米軍旧核ミサイルメース B 基地の保存の意義やその基地にまつわる逸話など、興味深い内容ばかりだった。

1960年代当時の沖縄は、アジア最大の核爆薬庫であり、1,300発もの「戦術核」が配備されていた。それらは、恩納村、読谷村、勝連町、金武町に、配備された。なかでも、米軍旧核ミサイルメース B 基地は、当時の中ソにらみをきかせるために、建

設された巨大な要塞であった。同基地は、1962年に設置され、32基の発射台を有し、広島原爆の70倍の威力を持つ有翼核ミサイルを運用可能にした。その発射台のコンクリートは、厚さ約1.5メートル、鉄筋の太さは一般的な建築物の2倍といういかにも核要塞らしい頑丈な構造になっていた。

キューバ危機の時、嘉手納基地の司令部から発射命令があり、デフコン2（戦争への準備段階を5段階に分けた米国防総省の規定のうち、デフコン2は、最高度に準じる防衛準備状態である。キューバ危機の際に一度だけ宣言され、沖縄の恩納村においては、核弾頭ミサイル・メース B の発射準備が実施された）のままでの発射に疑問を感じた核ミサイルメース B 基地の司令室が問い返したところ、間違いであったことが判明し、核戦争突入の危機を直前で回避した。嘉手納基地は、その後、1970年に撤去された。

研修道場は、広大な施設であるため、我如古氏が用意してくれたカートに乗り、まずは施設を周遊した。現地ですばらしいロケーションには全く似つかわしくない巨大な要塞だが、要塞そのものは、現在、平和を考える原点として保存されているため、むき出しのコンクリートの威容という感じではない。外観からも、六角形の発射口だったと思われる穴が確認された。基地内部に入ると、まさに身体が凍りついた。コンクリートの冷たさは、外界の灼熱を遮り、空気は澱んでいる。発射口は、発射台内部の形状を残した展示室になっている。その展示内容は、『「戦争の基地」から「平和の要塞」へ』であった。さらに、地下に進むと、指令室や格納庫があり、コンクリートの塗色が剥げているのが何ともリアルであった。我如古氏によると、創価学会名誉会長の池田大作氏が、1983年3月にここを初めて訪れた時、要塞は、すでに廃墟と化しており、地元では、取り壊そうという声があがっていた。しかし、池田名誉会長は、地元の人々の心情を十分理解しつつも、反対された。「いや、基地の跡を永遠に残そう。人類は、かつて戦争という愚かなことをしたんだという、ひとつの証として」さらに、「日本はもちろん世界の平和を考える原点の場所としよう」と言われ、旧米



写真1 茶谷の丘の創価学会沖縄研修道場



写真4 有翼核ミサイル模型



写真2 世界平和の碑



写真5 指令室と格納庫をつなぐ廊下



写真3 米軍旧核ミサイルメースB基地外観

軍基地を平和利用するという発想で、保存を決められた。

ロシアによるウクライナ侵攻が始まると、来館者が増え始め、学校の修学旅行や研修旅行も、積極的に受け入れている。研修道場は宗教施設でもあるため、そうした展示については、希望される方のみで、

あくまでも、展示や見学コースについては、旧核ミサイルメースB基地を通じて、平和を学ぶ施設として整備されている。見学は、1.5時間コースで、沖縄平和記念館では、1階では映像資料を見ることができ、2階では、沖縄戦を体験された方々の「沖縄戦の絵」が展示されている。そのため大人数であっても分散することで同時に見学可能だ。また、この「沖縄戦の絵」は、借用することも可能で、事前学習にも活用できるようになっている。著者も我如古氏から「沖縄戦の絵」のチラシと「沖縄戦の絵」パネル借用申込書をいただいた。

核ミサイル基地をつくることによって、中ソと対峙することは、核抑止論を背景とするものだが、この基地で起こった誤って出された核ミサイルの発射命令や、誤射（例えば1959年6月には、那覇空港の米軍施設から、不発だったものの誤射も実際起きていた）を考えると、いかに危険な考え方が理解できよう。この施設の持つ現代性は、私たちに、平和を構築することの大切さと平和を「ジブンゴト」で、

考えさせてくれるリアルさである。

帰り際、我如古氏が、沖縄尚学高校出身であることがわかり、今回の視察の縁を感じた。



写真6 「沖縄戦の絵」展



写真7 「沖縄戦の絵」展示作品

### ●あなたに伝えたい、コザまち物語 基地のまち KOZAを歩く

同日午後著者は、バスを乗り継いで、コザの町をめざした。沖縄は戦後、鉄道の敷設がされなかったこともあって、バスが公共交通の要となっており、乗換停留所での接続も考えられている。ところが、車社会である沖縄県では渋滞が常態化しており、せっかくのバスの接続も間に合わないこともあった。コザ暴動のあった胡屋十字路は胡屋というバス停からすぐであった。現地の看板は英語表記で、どこか異国の町に来たような錯覚を受けた。かつてはこうしたコザの町をチャンプルータウンと呼んでいたらしい。胡屋十字路に面したコザミュージックタウン内に沖縄観光物産振興協会があり、渡久山氏とガイ

ドさんが待っていてくれた。立命館守山中学校の沖縄研修のコース通り、2時間30分のコースで、案内してくれることになった。コザのある沖縄市は、現在、沖縄県第2の都市で、約14万人の人口を抱えている。戦後、米軍のドルを求めて、沖縄県内をはじめ沖縄市には、アジア諸国から人々が集まってきた。十字路から嘉手納米軍基地の第2ゲートに伸びるゲート通りは、基地の門前町として、アメリカ的な雰囲気を残している。「日本なのに、日本じゃない」錯覚を覚えていると、紳士服店のインド人が親しく声をかけてきた。聞くと、彼で、2代目だそうで、彼の話す日本語には、全くインド人の面影はない。さらに、ゲート通りを進むと、独特の看板（建物に直接文字を書く）やネオンサイン、壊れかけた看板、かすれた文字など見受けられ、そうした看板にも、異文化を受け入れてきたコザの変遷を見ることができる。そして、ついに嘉手納基地第2ゲートが見えてくる。フェンスの向こうは米国であり、撮影すらできない。

ゲート通りに面して、沖縄市戦後文化資料展示館ヒストリートがある。沖縄市の人々は、基地から派生する様々なエネルギーと異文化と接しながら、きわめて個性的な文化を創出してきた。そうした沖縄市の戦後を系統的に学び、戦後の生活がわかるように、ヒストリートでは写真や資料とともに雑貨も展示されている。ヒストリートは基地の存在が、市民の日常にどのような影響を及ぼすかということを知るための、リアルな平和学習の場になっている。1945年9月7日、現在の嘉手納米軍基地で、沖縄戦の降伏調印式が行われた。以来、コザには、ファッション、ミュージック、グルメなど、アメリカ文化がドルとともに、雪崩こんできた。米国は、朝鮮戦争、ベトナム戦争に踏み込み、沖縄から出撃していった。米軍にとっての沖縄は、戦略上アジアの最重要軍事拠点として使用された。基地の町コザは、戦争が激化するたび、繁栄を迎え、米兵は不安や恐怖をごまかす手段として、大量のドルをばらまいた。皮肉なことに戦争がコザに富をもたらし、兵士のニーズを通じて、多様な文化を生み出した。現在でも沖縄市では、飲食店などでドルが使える。実



写真8 コザの街なみ



写真9 嘉手納基地境界線ラインの向こう米軍基地



写真10 嘉手納基地上空を飛行する米軍機

際にドルを使いながら、基地から派生した「日本の中のアメリカ文化」を体験できるようになっている。

嘉手納基地の全貌が見えるところがあると伺って、沖縄市立図書館に向かった。エレベーターで、屋上まで上ると、そこから見えるものは、日本の中の米国である。沖縄戦での米軍上陸地点も基地の向こう側に見える。米軍上陸地点については、島津氏の琉球侵攻地点と同じ場所でありそこは、沖縄本島で、唯

一環礁が切れている場所だ。沖縄戦当時、米軍の上陸地点がある程度予測されながら、日本軍は最も有効な水際作戦を取らず、首里城に軍令部を置いた。島津が来て、米軍が来て、歴史は繰り返された。基地の反対側には、沖縄独特の亀甲墓が見え、その大きさに驚いた。清明祭では、親族が集まり、宴を催すと聞いていたが、得心できる大きさであった。

コザの商店街を散策しながら、コザ暴動について考えた。1970年12月20日未明、コザ市（当時）で、市民たちによって、米軍MP車を含めた米兵所有車両82台が放火された。事件の発端は、米兵の起こした3件の交通事故だった。暴動と言っても、略奪もなければ、殺人や傷害もない騒動というものだった。とはいえ、市民たちは、ゲート通りを通過して、第2ゲートから嘉手納基地に侵入し、午前7時ごろまで放火し続けた。これほどの騒動になったのは、米軍統治による差別や人権侵害、相次ぐ事件事故に対する不満が爆発したからだろう。

このように、コザの町をフィールドワークすることは、リアルな沖縄を知ることと直結している。戦後77年が経過して、アジア太平洋戦争が遠い過去のものになろうとしているいま、コザは、戦争とは何か、平和とは何かを自らに引き寄せて、「ジブンゴト」として考える機会を提供してくれる場所である。

沖縄市は、「米軍統治」「本土復帰」「基地問題」「基地経済」「多文化共存」「コザ暴動」をキーワードに、①違いを認めること②答えは1つではないこと③自分の考えで行動すること、これらをコザから学ぶポイントに挙げている。沖縄市では、51か国、約1,500人の外国籍の市民が暮らしている。そこには国、民族、宗教、思想、性別、言語など、背景の異なる人々が暮らしているのだ。多くの方々がつらい思いをし、苦勞しながら働き、生活してきた分、他者を思いやる寛容な心ある人の町でもある。

#### ●あなたの沖縄に出会う 沖縄県立博物館・美術館

7月23日（土）、午前中は、ゆいレールおもろまち駅に隣接する沖縄県立博物館を見学した。復帰50年特別展「沖縄、復帰後。展—いちまでいんか

なさ オキナワ—」を観た。沖縄が日本に復帰して50年になるが、戦後27年間の米国統治を経て復帰したことは沖縄にとって「世替わり」というほどの大きな転換点であったことが理解できる。これらの特別展は、復帰後の復興・成長・変化・継承・存続の歩みを振り返り、沖縄について考える展覧会であった。また、博物館の常設展示は充実しており、沖縄の自然、歴史、文化、芸術を同時に触れることができた。沖縄修学（研修）旅行では、まず、沖縄県立博物館で、概観を知った上で、各地に、見学やフィールドワークなどに向うと、一層理解が深まると思う。博物館の内容は、多岐にわたっており、一通り観るためには、2時間以上かかるのではないかな。

それにしても、沖縄の人々は、どうしてこんなにも苦労ばかりしているのだろうか。沖縄は、これからどうなるのだろうか、沖縄のことを考えるたびに、誰もが疑問に思うことだろう。アジア太平洋戦争では、本土決戦を遅らせるために、沖縄を時間稼ぎの捨て石にした。戦後は、本土だけの独立のために、アメリカの半永久的な占領にゆだねた。そして、沖縄の本土復帰後は沖縄の基地で、日米安保を支えてもらっているが、沖縄が経済援助を求めると、「沖縄を甘えさせるな」と、本土の政治家は言う。沖縄についての私のもやもやした感情は、「沖縄は、日本か」という問いからもたらされるのだろう。

沖縄は地理的に本土から遠距離にあったということもあって、独立性の高い文化性を持った。そこは独自の言語を持ち、独自の神話を持ち、独自の古典を持ち、琉球王国という独自の国家まで打ち立てた。琉球王国は明との冊封により、大きな経済上の恩恵を得ていた。当時は、東アジアから東南アジアの中継貿易によって、島に利潤がもたらされた。1485年に制作された「万国津梁の鐘」にその交易での琉球国の繁栄が刻まれている。

それに目を付けたのが、薩摩藩だ。1609年琉球王国を侵略し、与論島から奄美大島の割譲および租税徴収を断行。他方で、琉球国に、中国との冊封関係を維持させた。1879年の日本による琉球併合（琉球処分）までの270年間、琉球国は、明（のちに清）との冊封と朝貢関係、薩摩藩からの政治・経

済等のコントロールという日支両属下におかれた。江戸時代中期、西回り航路が整備され、蝦夷地の昆布が松前藩を通じて、富山藩・薩摩藩へ、さらに琉球国を通じて、清国へと流通し、清国からは漢方薬、琉球国からは租税として砂糖が大坂に持ち込まれた。この交易ルートは、昆布ロードと言われ、薩摩藩と富山藩に大きな富をもたらした。その間も、琉球国は辛うじて、独立を保ち続けることができた。琉球併合直前には、欧米諸国（米・仏・蘭）が琉球国を独立国として認め、相次いで、修好条約を締結している。

ところが琉球併合後には、沖縄の人々にとって、日本の天皇と文化的共通性が全くないため、徹底的な「皇民化」政策が行われた。当初、明治政府は、琉球国に対して、「信（よしみ）を通す」外交関係のある異国とし、副島種臣は、「琉球の政体国家体は永久に変わらず」と見解した。ところが、1872年琉球王府尚泰王を華族に加え、1879年琉球併合し、1879年中国との関係断絶を迫る。その理由は、当時の明治新政府内の「征韓論政変」と「台湾出兵」によるものだった。

琉球併合以降、琉球人・琉球民族に対して、同化教育・皇民化教育が推し進められ、1891年の小学校就学率は、14.9%に過ぎなかったが、1906年には、90.1%にはねあがった。とくに、「方言札」を用いた標準語の強要によって、琉球語は方言とされた。他方、経済的には、支配層が本土出身者で、内地と異なる特別な法制度と旧慣で縛っていたため、第一次世界大戦後の砂糖の暴落によって、地域経済が破綻し、「ソテツ地獄」に陥った。本土の大都市圏の移住や出稼ぎにとどまらず、海外移民も急増した。こうした言語の違いや経済格差等によって、沖縄差別は常態化していった<sup>1)</sup>。

沖縄は、アジア太平洋戦争末期の最大の激戦地となった。沖縄県民12万人を含む20万人が犠牲になった地上戦では、県民の4人に1人が死亡した。「鉄の暴風」と言われた米軍による無差別大量砲撃を受け、沖縄は、国体護持のための捨て石にされた。それは無謀な戦争継続のための時間稼ぎであった。日本軍は、沖縄の人々を守るどころか、自分たちが

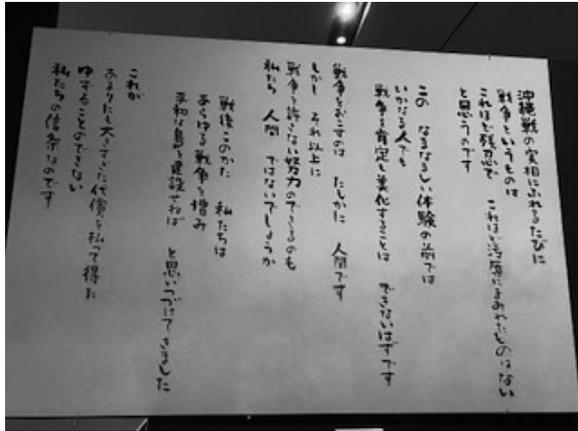


写真 11 沖縄県立博物館展示作品



写真 12 沖縄県立博物館保存家屋

理解できない琉球語を使う住民をスパイ扱いし、虐殺や集団自決を強制した。いまでも、沖縄の人々の中には、「軍隊は、住民を守らない」という不信感は、根強い。

沖縄に米軍基地があるのは、「沖縄戦」の結果である。まさに、「基地の中に沖縄がある」のだ。戦後、東西冷戦の中、サンフランシスコ講和条約が締結され、戦争状態の終結、日本の独立、朝鮮・台湾・南樺太などの領土放棄が明文化されると、同時に、沖縄は、領土の扱いは日本のままで、施政権は米国に移された。米軍施政下、「銃剣とブルドーザー」政策が実行された。その一方で、本土の基地は、当時沖縄の10倍以上も存在したが、反基地運動が反米運動につながる恐れを感じた米国政府は、本土側の基地を整理縮小することにした。そのため米国政府は本土から遠く、米軍統治下の沖縄の基地負担を増やしていったのである。日本国内には、核兵器を拒絶する世論が高まりを見せ、「核兵器を持たず、作らず、持ち込ませず」の非核三原則が確立

されていった。ところが、沖縄には、合衆国憲法も日本国憲法も適応されず、自由も民主主義も自治も権利もない状態が続いた。琉球列島米国民政府は、布告・布令・指令を出し、「沖縄住民による自治は神話に過ぎない」とまでうそぶき、道理に合わない抑圧を繰り返した。

もともと琉球国は、日本とは別の国で、日本の固有の領土とは言い難いのではないか。沖縄で、「祖国復帰運動」が昂揚した理由は、日本の一部になることで、日本国憲法が適用され、憲法の平和主義によって米軍基地が撤廃され、米軍由来の事件や事故がなくなると考えたからではないか。また、日本の社会保障制度が適用されることで、生活が楽になると考えられたからではないか。ところが、復帰にあたって、日米地位協定が結ばれ、米軍による第一次裁判権を持つ実質の治外法権などの米軍の特権は温存された。こうした歴史から沖縄の人々にとって、米国民や米国政府は、日本国民や日本政府を対等な人間、政府として認識していないと考える人が少なくなく、米軍基地は、戦争の抑止力と考えるよりも安全や生命を脅かす暴力源と考えられている。

復帰後、沖縄開発庁が設置され、沖縄県の開発計画を作成した（沖縄振興法）。そのうち90%が公共事業投資で、本土のゼネコンによる大規模土木開発であった。受注企業の約半分が本土資本で、「ザル経済、砂漠経済」と言われたが、県内総生産は、1972年当時4,592億円だったものが、2017年には9.6倍の4兆4,140億円にのぼっている。現在、軍関係受取6.0%、観光業14.9%、財政依存度37.8%占めている。公的資金に大きく依存しているものの、基地経済からは脱却しつつあり、観光が大きく発展している。しかし県民所得は、国民所得の316.4万円を大きく下回り、全国最下位で234.9万円となっている。入域観光客数1,016万人に支えられた第三次産業に大きく偏っている。返還後の公的資金への依存は、沖縄県民の主体性も同時に奪っていったのである。

2007年、国連は「先住民族の権利に関する宣言」の中で、先住民とは特定の地域に住み、独自の言葉、社会組織、信仰、精神世界、経済様式、慣習的法制

度や土地制度など、ほかの地域とは異なる生活を行う民族とした。国連は、琉球人を先住民族として認識し、米軍基地の押し付けを人種差別として考え、琉球の歴史や文化の教育を求めるとともに、差別の監視や権利保護措置にかんして、琉球側と協議するように、日本政府に勧告している。また、2009年には、ユネスコが琉球語の言葉を独自の言語として位置付けた。現在、普天間基地の代替として、辺野古移設・基地建設が大きな争点となっている。海外には、カナダのケベック州やイギリスのイングランドなど、国家の枠組みを変えず、高度な自治権を有するエリアがあり、住民は自治権を持ち、自己決定権を行使している。沖縄についても高度な自治権と平和的生存権を持つべきではないか。

### 3章 研修視察の成果を踏まえた「ジブンゴト」 平和研修の構想とプラン

【プランA 沖縄県立博物館】「沖縄2億年の歴史を1時間で旅する」

総合展示室の他、展示室は、自然史部門（地学・生物・人類）・考古部門・美術工芸部門・歴史部門・民族部門に分かれており、総合展示室は、序章「海と島に生きる」と7つの時代の流れに沿って、沖縄の歴史を知ることができる。

- ① 海で結ばれた人々
- ② 貝塚のムラから琉球王国へ（琉球王国時代のはじまり）
- ③ 王国の繁栄
- ④ 薩摩の琉球支配と琉球王国
- ⑤ 王国の衰亡
- ⑥ 沖縄の近代
- ⑦ 戦後の沖縄

とりわけ旧首里城正殿鐘は、「万国津梁の鐘」と言われ、世界の架け橋を意味しており、目玉展示となっている。「ウチナー探検博物館学習ノート」（小学生版・中学生版・高校生版すべてPDFファイルURL:<https://okimu.jp/education/worksheet/>)をダウンロードして利用できる。

【プランB 不屈館】「米軍が最も恐れた男～カメジロー不屈の生涯」

展示コーナー・閲覧コーナー・書齋再現コーナー・DVD視聴コーナー・ミュージアムショップで、こう施されているが、民衆の支えによる民衆のための資料館をめざしているため、展示スペースは狭い。そこで、近隣にある「対馬丸記念館」との相互見学をすすめる。

「不屈館」の学習テーマとしては、

- ① なぜ、カメジローは、『不屈の男』になったのか？
- ② なぜ、カメジローは、本土復帰闘争を闘ったのか？
- ③ なぜ、沖縄と本土との溝が深まり続けるのか？
- ④ 本土と沖縄、アメリカによる沖縄統治はダブルスタンダード？

また、対馬丸記念館では、記念館は、「子どもと平和」をテーマとしており、「対馬丸撃沈事件とは」「戦前の小学校」「沖縄での戦争」で、展示が構成されており、ワークブックをダウンロードして、活用することができる（URL:<https://www.tsushimamaru.or.jp/courseware/>）。

【プランC 沖縄研修道場内沖縄池田平和記念館】  
「世界平和原点の地」

創価学会沖縄研修道場は、かつての米軍「核ミサイルメースB基地」跡地に、1977年建設され、その敷地内に取り壊されずに残っていた「ミサイル発射台」は、1984年に、池田名誉会長の提案で、6体のブロンズ像が建つ「世界平和の碑」へと生まれ変わった。その一角に、常設の「沖縄平和池田平和記念館付属展示室」がある。中国に向けられていたミサイル発射台の跡に設置された「沖縄平和池田平和記念館付属展示室」は、発射内部の形状を残している。米軍基地を平和利用している施設は、世界中を見ても極めてまれな施設である。

「沖縄研修道場内沖縄池田平和記念館」の学習テーマとしては、

- ① なぜ、かつての米軍の核ミサイルメース基地

跡地を保存したのか

- ② なぜ、米ソ冷戦下の中、ミサイル発射台が、中国に向けられたのか
- ③ この施設が持つ現代的意義とは何か（ロシアによるウクライナ侵攻での核使用問題）
- ④ なぜ、『沖縄戦の絵』展の取り組みをはじめたのか

核ミサイル基地を平和の発信地に 沖縄研修道場  
沖縄本土復帰 50 年 | 創価学会公式

URL:<https://www.youtube.com/watch?v=z516aIVcpJE>（最終閲覧日：2024.2.2）

【プランD あなたに伝えたい、コザまち物語  
基地のまち KOZA を歩く】一般社団法人沖縄市観  
光物産振興協会

沖縄市は、「異質」なものを積極的に受け入れて発展してきた。51 か国、1,500 人（人口の 1%）の外国籍の市民が暮らす。「コザは異質の町である」と民俗学者の宮本常一が、基地の町コザ（現在の沖縄市）を評している。米軍統治下において、嘉手納基地からさまざまな影響を受けながら、混乱と激動をたくましく生きてきた。米軍統治時代は、人権無視の悲惨な事件事故が相次いだ。米軍との共生を余儀なくされ戦闘とは違う闘いがあった。まちそのものが展示室だが、沖縄市戦後文化資料展示室「ヒストリート」（約 2,200 点の展示資料）での観光ガイドによる見学・説明があり、その後、まちあるきに出かける。

1. 米軍統治下時代を解説しながら、中心市街地や嘉手納基地をめぐるまちあるき
2. ドルで買い物しながら、外国人店主などとの交流を体験するまちあるき
3. 独特の看板（建物へ直接文字を書く）やネオンサイン、壊れかけた看板を辿りながらまちの変遷を体験するまちあるき

また、圧倒的な規模の嘉手納基地を一望することもできる。

学習テーマとしては、

- ① 沖縄市コザのまちの人々にとって、語りたいたいこと、誇りたいこととは何か

- ② なぜ、看板に特徴があるのか
- ③ なぜ、外国人の店主がいるのか
- ④ なぜ、米軍による事故や犯罪が相次いだのか
- ⑤ なぜ、日本であるのに、米軍基地に日本人が立ち入れないのか
- ⑥ なぜ、日本なのに、コザの町では、ドルが使用できたのか

また、沖縄市体験プログラム本「チャンプルー学習帳」があり、リーフレットは、公開されている

URL:<https://www2.t-expo.jp/download.pdf>（最終閲覧日：2024.2.2）。

## 4 章 おわりに

これまで多くの中高生が、修学（研修）旅行で、沖縄を訪問し、「悲惨な沖縄戦」を学んできたにもかかわらず、近年、沖縄の軍事要塞化が加速的に進んでいる現実をどのように考えたらよいのだろうか。沖縄戦の悲惨さを表面的に学んでも、現在の沖縄の状況とは無関係とされがちである。この「ジブンゴト」沖縄平和研修視察は、1945 年の終戦から現代の沖縄に着目し、問答無用の平和主義を生徒に押し付けるのではなく、何がどう「悲惨」だったのか、生徒の批判的思考を引き出したい。みずから問いを立て、探究し、さらに問いを深めたい。

### 【注】

- 1) 1903 年の人類館事件（第 5 回国内勧業博覧会で、アイヌ・台湾先住民・朝鮮人・中国人・インド人・アフリカ人とともに、琉球人女性二人が展示される）はその一例である。さらに戦後は在日米軍専用施設が、沖縄に集中することでの「構造的沖縄差別」が顕在化した。これは 2016 年辺野古基地移設での機動隊と反対派との間で、機動隊員の「土人」（シナ人とも）発言にもつながっている。